



千田マミ 「枇杷心大薬本」 紙、布、糸、紐、木材、枇杷の葉

実家の庭にある、二本の大きな枇杷の木をモチーフにした、ギフトボックスを制作。枇杷の花言葉は「治癒」。また、枇杷の木は「大薬王樹:最高の薬木」と呼ばれ、約三千年以上前から薬効が知られ大切に扱われてきた。「外面的な意味だけでなく、もっと内面的な傷や問題を治して癒やし、前向きな風があなたに訪れますように」という願いを込めて、昔から続く枇杷と人との関係性を再構築し、この作品に触れてもらい枇杷の持つ意味を伝えるため、生活の中に取り入れやすい生活雑貨を中心としたオリジナルグッズ、大切にしている言葉を集めた本などをひとつの箱に閉じ込めた。自分を大切にしながら相手を想いあう、そんな世の中を目指して。







川合琴子 「写真展〈自然人〉」

インクジェット、プリント、シルバー・ゼラチンプリント、ポジフィルム

北海道・オホーツクに暮らしながら、多くの風景写真を撮っていた祖父の展覧会をプロデュースした。建築の仕事をしていた祖父が1985年に造ったペンションの一室を会場とし、「自然が好きな人々の憩いの場を作りたい」という想いを受け継ぎ、人々が作品を通して想いを巡らせる展覧会を企画、実施した。鑑賞するだけではなく、来場者同士がこの地域にまつわる思い出を共有する参加型の展示も組み込み、展覧会全体を通じて祖父の風景へのまなざしを共有し、過去と現在を比較しながら楽しむことのできるよう願いを込めた。





人物紹介

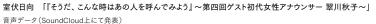
製川秋子 本名: 萩野千代 1889年 (明治22 年) 9月 - 1935年 (昭和10年) 8月20日

女子美の卒業生であり、日本で女性初のアナ

女子園卒業後、銀行員と結婚。2 男1女をも うける。結婚11年で夫と契別、その後家庭を 支えるため、開局に向けて事備を行ってい た東京中央放送局に入り1925年日本初の女性 アナウンサーとなった。 各額の家庭議席を担当。

毎初の家庭講座を担当。

なが助代の収益を指する。 なが助代の収益とりは強く、薬川は他部署の男性に無行を受ける、身に覚えの無い汚るを着 せられ、1年足らずで迅速する。その後は後藤新年の「家庭電気管理会員」の雑誌「家庭の電 別、の仕事や、百貨店白木屋の信報、新総に担合する人屋「ろとり」を開いた。1935年(同町 10年)8月6日、栗川の子3人が7月75日に母が収取で家を出たまり帰って来ないと世際に図む た、栗川は、子女に「子供も大きくなって責任を表たした」行の命目は7月25日。「兄弟仲 度く」「薄中に身を立み来てる」と連書を残しており、変らに確実が行われた。しかし、8月 20日年和総計の分十三県部は一部、田田原で窓川の選本が発見され、その後の確重でおす人屋 の客だった年下の東京都・連出区役所報義と企中したことが利明した。



出典: 「続 昭和史のおんな」文藝春秋 (1983年)、

フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」 翠川 秋子 (https://ja.wikipedia.org/wiki/翠川秋子)

女子美術大学の卒業生である、女性初のアナウンサー翠川秋子の人物研究を通して、卒業を迎える女子美生に向けたエールとなる作品を制作した。等身大の自分に近いキャラクターと架空のラジオ番組を制作。ラジオの内容は、女子美に通う学生、イタコのいた子とナビゲーターてる子が、いた子の霊能力と『デンワ』と呼ばれる被り物の装置にて霊を憑依させ、会話の中で現代人へのアドバイスをもらうストーリー。ゲストとして登場した翠川秋子の生涯を通して、明治、大正、昭和にも存在した女性差別の問題やマスコミの過激な報道、過労、ひとり親の貧困などに切り込んだ。









ミュージアムエデュケーション演習 I・II (2・3年次必修科目) 「絵画のモデルになりきるセルフ・ポートレート」作品: (左上) 長尾早希子、(右上) 酒井麻里亜、(左下) 山下祐希奈、(右下) 磯田萌乃

ミュージアムエデュケーション演習では、主に展覧会やアートイベントの参加型ワークショップ等の企画・立案・実施までを行います。「絵画のモデルになりきるセルフ・ポートレート」の課題では、作品の再現だけではなく、アーティストの森村泰昌の表現や、2020年のコロナ禍においてロンドンナショナルギャラリーのスタッフが発信した作品等を学んだ上で、身近な素材等を活用し誰もが絵画に親しみをもつためのワークショップを実践しました。